



杉並景観録

SUGINAMI Keikan-Roku

第十二号



●発行日 平成20年3月18日
●発行 杉並区都市整備部まちづくり推進課
TEL.3312-2111(代)



良好な景観を残す 建物の保存

まちを歩いていると、心惹かれる建築物に出会います。

そこには、長年住まれてきた人の思いや歴史が、建築物や周辺の庭・門・生垣などに、風景の一部として残されています。

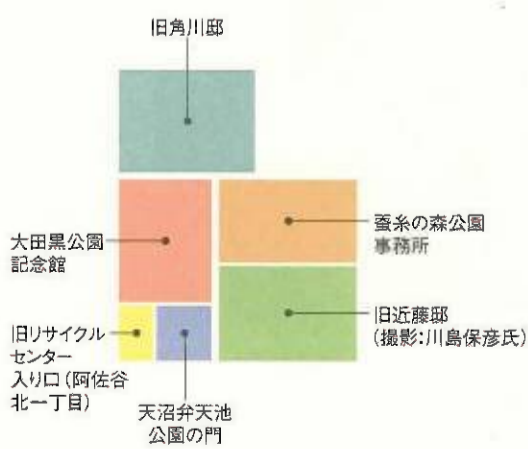
このような建築物やみどりによってつくられた風景が、長い時間を経て杉並のまちの財産となっています。

また、これらまちの財産である歴史や文化を象徴する建築物やみどりの変遷により、杉並が住宅都市として発展してきた経緯を知ることができます。

区では、文化人の邸宅であった旧角川邸や「トトロの住む家」と呼ばれる旧近藤邸を残すことにより、杉並の誇れる風景を将来にわたり、保存し、活用することとしました。

まちの景観が時代の流れと共に大きく変化していく中、建築物やみどりなどの貴重なまちの風景・財産を守り伝えるためにも、それらの建築物を使い続けていくことが重要であり、歴史・文化を継承していく上で大切なことと考えています。

区では、区民や、事業者の皆さんと共にこのような杉並区の貴重な財産を活用し、杉並の景観が、魅力にあふれ、誇りに思えるよう取り組んでいきたいと考えています。



歩きながら、元氣と文化が、すぎなみ
生まれる街。

「景観週間」開催

平成19年11月1日～10日

「今」だから考えたい杉並の景観

News

大田黒公園周辺地区 景観まちづくりイベント

3日・4日 大田黒公園

2日間にわたり、記念館では東京ベートゥエン・カルテット(第1ヴァイオリン/山中光 第2ヴァイオリン/平川由佳子 ヴィオラ/中川裕美子 チェロ/奈切敏郎)による弦楽四重奏コンサート、青柳いづみこさんによるピアノコンサート、茶室での点茶会、芝生広場での野点のほか園内では、写真展やパネル展示が行われ、両日とも500名を超える来園者がありました。



写真展



野点(芝生広場にて)

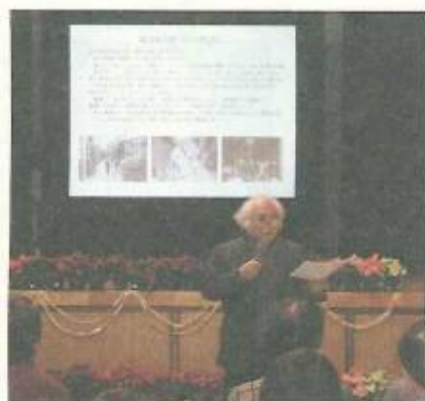
News

前野 堯(まさる)講演会

「杉並の景観を見出し、守り、育てるために」

小田陽子ミニコンサート「ロマンを歌にのせて」

10日 産業商工会館



まちの魅力について語る前野先生

はじめに区内在住で多方面にご活躍されている小田陽子さんによるミニコンサートが行われました。「マールが与えた人生(百万本のバラの原曲)」など、そ



ギターを弾きながら歌う小田陽子さん

の透き通るような歌声に参加者のみなさんもしばし酔いしました。

東京芸術大学名誉教授であり、NPO全国町並み保存連盟理事長やNPO東京を描く市民の会理事長と多方面でご活躍されている前野堯先生に景観についてお話をいただきました。

杉並の景観を見出し、守り、育てるためには、「自分がまちを好きになり、まちの表情をつくり、歴史を知り、大切なものは次世代に伝えていくことである」などとお話を伺いました。その後、参加者の皆様と、杉並らしさについて考えました。

参加者の皆様にポインセチアと絵葉書をプレゼントしました。



景観週間
2007
SHIBUYA CITY

プレゼントの
絵葉書

杉並の景観について区民や事業者の皆様と考える「景観週間」を開催いたしました。区ではこれまで様々な景観まちづくりに関する取組を行ってきました。平成17年には景観に関する総合的な法律「景観法」が施行され、良好な景観の形式に関し、自治体が独自に取組を行うことができるようになりました。



現在、区では、杉並区の景観をよりよくするための仕組みをもちこんだ景観条例の制定の準備を進めているところです。

そこで、これまでの景観まちづくりを見つめ直し、今後のあらたな景観まちづくりについて区民や事業者の皆様と考えるため「景観週間」を開催しました。

開催にあたり、多くの皆様にご協力いただきありがとうございました。

News

阿佐谷の魅力デザインする

7日 区役所中棟6階第4会議室(発表会)

1日～5日 区役所中棟1階ロビー(展示)

工学院大学の学生のみなさんによる発表・展示

工学院大学建築都市デザイン学科の設計課題「街の顔としての賑わい遊動空間をデザインする」について、倉田直道教授指導のもと、阿佐谷周辺を対象に取り組んだ成果を発表しました。

住む人の立場になって、あるいは初めて訪れる人の立場になって様々な視点から捉えた「これからの阿佐谷」に対する街づくり案が提示されました。



模型の展示



倉田先生による総評

News

杉並の残したい風景 in 西荻界限 ～ストリートアート展～

1日～9日 西荻北銀座通り店舗等、勤労福祉会館
計14ヶ所

「東京を描く市民の会」の会員の方が、杉並の風景を描いた絵画など計60点が、NPO西荻まちメディアのご協力により、西荻北銀座通り13店舗及び勤労福祉会館に展示されました。

【ご協力いただいた店舗】

喜久屋商店、えびすや、東京三菱UFJ銀行西荻窪研修所、杉並ロックセンター、三月の羊、エーラク、ケア24善福寺、インド料理ガネーシャガル、洋食のみかさ、御菓子司青柳、GALLERYsind、多奈加率ファームハウス西荻店、東京航空専門学校



店頭飾られた絵画

Topics

下井草駅 改修されました

西武新宿線下井草駅の改修工事が完成し、19年9月に地元商店街、自治会の主催で落成式が行われました。エレベーター・エスカレーター・自由通路を整備し、誰もが使いやすい駅となりました。この駅のシンボルである桜をうまく活かしています。





旧角川邸

旧角川邸は、前所有者の遺族から平成17年度に、区に寄贈されました。

この建物は、俳人・国文学者であり、角川書店の創設者である故角川源義（げんよし）氏の居宅でした。源義氏は、昭和50年に亡くなり、その後、奥様が住まわれていました。

昭和30年に建てられた近代数寄屋風の木造の2階建てと昭和48年に増築した書庫と書斎の鉄骨2階

建物概要

- 1) 敷地面積: 1,391.87m² (公簿)
- 2) 建物用途: 住居
- 3) 構造: 木造一部鉄骨造2階建
- 4) 面積: 1階 213.19m²
2階 69.68m²
計 282.87m²
- 5) 住所: 荻窪3-14-22



現状敷地図 (イメージ)

四季を愛でる家が人々に歌を詠ませる

建ての部分がありません。

設計者は、俳人でもあり、建築家でもあった加倉井昭夫氏。施工は、数寄屋建築で定評のある水澤工務店です。

ここは、源義氏から幻戯山房（げんぎさんぼう）と呼ばれていて、津田青風（画家）による書の額が、現在も居間に飾ってあります。



区では、平成17・18年度に残された図書や建物の調査を行い、平行して、活用方法の検討も進めてまいりました。

その結果、源義氏にちなんで、俳句や短歌を詠む人々が集える場として、（仮称）「角川庭園」「幻戯山房」すぎなみ詩歌館（しいかかん）」として、整備すること

になりました。現存している建物を、外観はできる限り創建当時の姿に復元し、内部は、利用しやすいように改修する予定です。庭は、四季折々の様子を楽しめる「角川庭園」として、散策できるよう整備することを考えています。



津田青風(画家)による書 幻戯山房



近藤邸の写真を撮影した写真家の公文健太郎さんとそのきっかけを作ったグラフィックデザイナーの伊勢功治さんにお話を伺いました。

伊勢 「近藤先生とは、デザイン学校の先輩と後輩にあたります。家が、無くなってしまおうというので、ビデオをもって見に行ったのです。

伊勢さん 公文さんに聞く

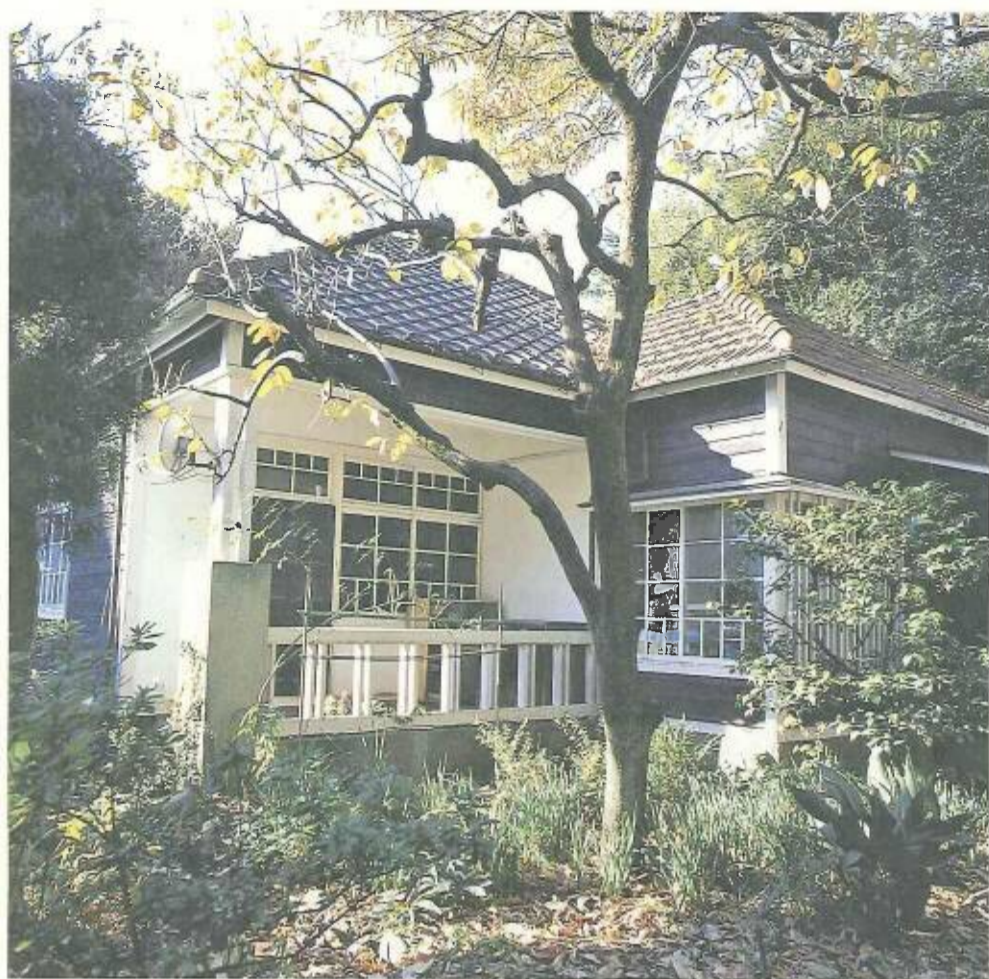
そうしたら、庭や建物に心を魅かれ、記録だけでも残そうと、写真家の公文さんにたのんで、四季を通して写真を撮ってもらいました。

人が住むということと、周りの自然、みどりだけでなく、昆虫・池の中の生き物も含めてですが、いっしょに生るということについて考えさせられました。」

公文 「いま、力を入れてエコと言っていますが、周りの環境といかにバランスよく、暮らしていくかということですね。改まって、何かするのでなく、自然にできているところに魅かれます。」

今後、お二人は、四季折々の変化を見せる旧近藤邸の記録を、未来ある子供たちに物を大切にすることを伝え、その心を育ててほしいと、近藤さんのエッセイとともに、写真集『キンモクセイの家』として出版したいと考えているそうです。





建物概要

- 1)敷地面積:約800㎡
(隣地駐車場含む)
- 2)建物用途:住居
- 3)構造:木造平屋建
- 4)面積:1階 72.72㎡
- 5)住所:阿佐谷北5-45-14

旧近藤邸

この建物は、関東大震災後の東京の都市計画にかかわる仕事をしてきた近藤謙三郎氏が昭和初期に建てた洋館です。

その後、近藤氏の姪の英さんが、譲り受け、住まわれてきました。借地であったため、昨年、土地を所有者に返すこととなり、建物も庭もなくなるようになっていました。

ここは、宮崎駿氏の著書「トトロの住む家」の中で「植物たちと生き物同士のつきあいをしている」「よい家」と紹介され、また、区民の方からの推薦で杉並「まち」デザイン賞にも輝きました。近所でも親しまれてきたこの家の存在を惜しんで、区長宛に6300名余りの署名の入った「建物と樹木の保存」の要望書が提出されました。区では、区民の皆さんから長年親しまれてきた貴重な建物とみどりを、平成20年に、購入し、今後、建物を含め敷地全体を公園として整備する予定です。

沢山の出逢いを生む植物に抱かれた家

撮影:公文健太郎氏

近藤英さんにインタビュー
Interview

現在は、別の場所に住まわれている、近藤さんにお話を伺いました。

「子どものころ、隣に住んでいて、あの家があるのがすごく好きだったのです。」

「せいたくもできず、たいへんなことも、あったけれど、木々たちから、随分、癒され、元気をもらいました。次の世代の子どもたちにも、植物は生き物で、人間も同じだということがわかる目を養ってほしいですね。」

「様々なものは、次のものに生まれ変わっていきます。私は、人間もその中の循環サイクルのひとつであることを、認識しながら、生きてきました。地球に生きるものとして当たり前なことではないでしょうか。」

「この庭も、そのひとつで、ゴミは、堆肥にして、土地に還元しているのです。そうすると、新しい生命・芽が出てくるのです。」
「それから、沢山のひとめぐり



あわせてくれました。
「宮崎駿さんもそのうちの一人です。キンモクセイに目を留められたそうです。20年前程に家の雰囲気魅せられた大学生たちが卒業制作の映画を撮影したことがありました。建物がなくなってしまうなら、絵を描いてくれた人たちもいました。私は、デザイン学校で、教えていたのですが、玄関を入って、すぐに教え子たちが、コンパをやりによく来ていました。」

「それから、30年前、自分が小学生だったところかわらない様子に心が震えた」と手紙を下された方もいました。いろいろな人との出会いが、守っていくという力のもととなりました。」

「新しくなる公園もいい出会いをしてもらえる場所になるといいなと思います。」

近藤さんの大事に思う心に庭の木々たちがこたえて、近藤さんの人生をすばらしいものにしてきているのだと感じました。

